



✧ 研究会報告 ✧

租界・居留地班 第 65 回研究会

「戯単研究の可能性—1950 年代上海を例に」

日時：2020 年 7 月 18 日（土） 14:00～16:00

場所：Zoom 会議

森平 崇文（立教大学）

「戯単」は中国語で公演プログラムやリーフレットのことを指し、「節目単」や「説明書」といった別称もある（以下、戯単で統一する）。戯単は、その空間に居合わせたものだけが享受でき、追体験が困難な、演劇というジャンルを研究する際の一次資料として、シナリオ、舞台写真、劇評、新聞広告、出演者の証言とともに、多くの情報を後世に伝えてくれる点で大変貴重である。しかし、図書館などの公共機関で体系的に保存されているわけではなく、断片的に個人が所蔵している場合がほとんどのため、そもそもアクセスが容易ではない。また保存状態が不良なものも多く、全頁が揃っていない戯単も少なくない。加えて戯単に掲載されている配役や演目のあらすじ等の情報と実際の公演に異同がないかを劇評等他の資料から検証する必要もあり、一次資料として扱いにくい。

現在日本国内では、九州大学附属図書館に中国研究者濱一衛（1909–1984）が 1930 年代の中国留学中に蒐集した戯単が多数所蔵されており、同大学の中里見敬教授が中心となってその整理と研究が進められている。このほか、名古屋大学には青木正児（1887–1964）、慶應義塾大学には奥野信太郎（1899–1968）、といった中国研究者が戦前の中国滞在中に蒐集した戯単が所蔵されている。中国では京劇が中心であるが戯単を収録した資料集として、杜広沛収蔵『旧京老戯単—從宣統到民国』（中国文聯出版社、2004）、杜長勝主編『回首当年—中国戯曲学院老戯単』（学苑出版社、2010）、倪曉健主編『菊苑留痕—首都図書館藏北京各京劇院団老戯単（1951–1966）』（学苑出版社、2012）、王文章編『梅蘭芳演出戯単集』全 3 卷（文化芸術出版社、2016）、などがある。また京劇四大女形の 1 人梅蘭芳の戯単を通じてその演劇を考察した研究成果に、谷曙光『梅蘭芳老戯単図鑑—從戯単探求梅蘭芳的舞台生涯』（学苑出版社、2015）もある。北京にある中国芸術研究院戯曲研究所の機関誌『戯曲研究』（第 113 輯、2020）では「戯単与演劇研究」という特集を組み、戯単を用いた 7 編の論考が発表されるなど、2010 年代以降、戯単を集めた資料集の刊行や戯単を活用した演劇研究も少しずつ進展している。

筆者の専門は中国演劇史、中でも 20 世紀上海の演劇史である。2001 年の上海留学期間中に市内の文廟で毎週日曜日に開催されていた古書市に足繁く通うようになり、そこで 20 世紀上海で出回っていた戯単の実物を目にする機会を得た。以降短期滞在の折にふれ、文廟の古書市での戯単の蒐集が始まり、病膏肓に入る状態となった。当初は研究のため資料として直接活用するなどといった下心もなく、当時の公演を追体験するための補助資料として時折眺めていただけであった。

筆者が蒐集に力を注いだのは 1950 年代の上海の地方戯、とりわけ滑稽戯と越劇である。1950 年代以前の中華民国期の戯単が市場に出回ることはずでに非常にまれで、しかも高価であり、蒐集には不適當と判断した。一方、1960–70 年代の文化大革命期は一部を除き戯単の紙質が悪く、また 1980 年代の改革開放期はレイアウトなどに魅力を感じず、蒐集の対象としてはあまり食指が動かなかった。結果として比較的廉価で市場にもある程度出回っている 1950 年代の戯単が蒐集の対象となった。滑稽戯の戯単を蒐集したのは筆者が博士論文で滑稽戯を対象としたからであり、何か研究の参考になればと考えたからである。一方、1950 年代の越劇の戯単は劇団によって個性が大きく異なり、カラフルでレイアウトにも特色があり、蒐集の対象として大変魅力的であった。滑稽戯と越劇の戯単の蒐集が一段落すると、滬劇、淮劇、甬劇、といった上海の地方戯の他、弾詞などの曲芸、雑技、アマチュア団体や演劇学校の公演、海外団体の上海公演、市外団体の上海公演の戯単と、蒐集の対象を拡げていった。京劇や昆劇、話劇の戯単も比較的に手に入りやすく、1950 年代上海の話劇公演の戯単は意識的に蒐集していった。

戯単に掲載されている情報は、出演者、上演演目、劇場名、公演時間、入場料に止まらない。中華民国期に入ると上演演目のあらすじや俳優の紹介、写真などを掲載する冊子タイプの「特刊」が京劇などでも刊行されるようになった。筆者の所蔵する中華民国期の戯単でも、話劇『阿Q正伝』（中法劇社、1937 年、13×18cm、全 32 頁）は「特刊」と明記された冊子タイプの戯単であ

り、あらすじや演出家のコメント、登場人物のイラストの他、劇場の構造なども紹介されている。同じく中華民国期の越劇の戯単『鳳簫相思』（雪声劇団、1946年、13×18cm、全12頁）にも、配役、スタッフ一覧、あらすじ、歌詞、舞台写真、次回上演演目、劇団の紹介の他、出演するラジオ番組の宣伝や主役やスタッフの文章まで掲載され、観客にとっては知りたい情報が満載である。人民共和国となった1950年代も越劇の戯単はこの体裁を踏襲しており、表紙は劇団や演目で異同があるものの、よりカラフルになっている。

1950年代の越劇の戯単にはさらに、玉蘭劇団の「信箱」、合作劇団の「答観衆來信」、少壯越劇団の「少壯信箱」のように、観客からの投書とそれに対する劇団の返信も掲載されており、演劇研究において把握がとりわけ困難な観客の反応や観客層を考察する上で非常に貴重な資料を提供してくれる。また東山越芸社の戯単には傅全香の「全香寄語」と范瑞娟の「演余雜感」、少壯劇団の戯単には陸錦花の「錦花小語」、芳華劇団の戯単には尹桂芳の「桂芳隨筆」と徐天紅の「天紅小語」、合作劇団の戯単には戚雅仙の「雅仙隨筆」というように、各劇団の花形俳優のエッセイが定期的に掲載されており、メディアなどでの公式な発言よりもファンに向けたメッセージのため、演目や劇団等に関する俳優の肉声により窺いやすい。

さらに1950年代の戯単は予想以上の情報も我々に提供してくれる。例えば、越劇『十三妹』（少壯越劇団、1955年、13×18cm、全12頁）の戯単に掲載の「通訊定票單」は、それを切り取って希望日時や住所氏名を記入し、劇場に郵送すればチケットの予約ができるようになっている。越劇『梁紅玉』（榮芸越劇団、1954年、17×17cm、全18頁）の戯単には、シナリオ、演出、演技、音楽、衣装など全9項目からなるアンケート用紙の頁がある。さらに、話劇『西望長安』（上海電影制片廠演員劇団、1956年、18×27cm、全4頁）の戯単には劇場へのバス、路面電車の路線案内と終電の時刻が掲載されている。観劇中に終電時刻を心配しないようにとの配慮であろう。また滬劇『妓女淚』（勤芸滬劇団、13×13cm、上演年と総頁数は不明）の戯単には、「上海文芸工会滬劇分会義務顧問醫師一覽表」として内科、小兒科、咽喉科など9名の医師の氏名と連絡先、診療時間も掲載されている。越劇『周仁献嫂』（新新越劇団、1955年、13×13cm、全32

頁）にも「本団医藥顧問」として2名の医師の氏名と連絡先が確認できる。これらの情報が直ちに演劇研究に資するものになるわけではないが、後世の我々は少なくともこれらの戯単を眺めながら当時の観客になった気分でご覧を体験することができる。筆者も上海の代表的総合娯楽施設「大世界」の1950年代を考察するに際し、1955年、1956年、1966年の各戯単に記載の公演プログラムと公演時間を見比べることが当時の公演の様子を想像する上で大変役立った。戯単には我々の読解力、咀嚼力次第で演劇研究に有効な情報が詰まっており、手に取って眺めていると常に何らかの新しい発見がある。



図1 話劇『阿Q正傳』中法劇社、1937年



図2 越劇『孔雀東南飛』東山越藝社、1950年



図3 越劇『桃花女破法』上海市振奮越劇団、公演年不明



図4 甬劇『合家歡樂』鳳笙雨劇団、1954年公演年不明